

## 先進校に学ぶキャリア教育の実践

# 時間のゆとりを主体的行動につなげ 自律的に探究し続ける力を育む

あがたがおか  
松本県ヶ丘高校  
(長野・県立)

探究を実践し続ける人の育成を目標に掲げる松本県ヶ丘高校。  
探究をコアとして、授業時間の短縮や海外研修の個別化などにも取り組み、  
生徒の学びを根本から変える仕組みづくりを着実に進めています。

取材・文／藤崎雅子

### 実践のKeyword

- 🔍 探究科
- 🔍 授業時間の短縮
- 🔍 オフィスアワー設置
- 🔍 総合的な探究の時間
- 🔍 全教科で探究
- 🔍 個別海外研修

### 真面目で探究し続ける人へ 学びを根本から変えていく

地域から「けんりょう縣陵」という愛称で親しまれ、今年度100周年を迎えた松本県ヶ丘高校。6年前まで普通科に英語科を併設していたが、より現代社会に対応する人材を育成する学校にしていこうと、同窓生による支援組織と共に英語科の改編に取り組んだ。そして2018年、探究学習の充実により総合的な学力の育成を目指す探究科をスタートさせた。以降、普通科を含めた学校全体において、探究をコアに据えたカリキュラムづくりや体制整備を進めている。

同校は生徒育成方針に、「探究を実践し続ける縣陵人の育成」を掲げている。同校に代々受け継がれる三大精神をベースに現在の同校は何を目指すのか、若手教員が中心となって言語化して提案、全教職員で決定したものだ(図1)。探究学習推進係主任・宮坂正議先生はこう語る。

「本校の探究とはどういうものかを改めて見つめ直し、その目的は素晴らしい探究結果を出すことではなく、『学ぶのは楽しい』『探究しよう』というマインドを育てることにあるのだと再確認しました。変化の激しい現代社会では、どこでどんな職業に就いたとしても、過去の成功にとらわれずに学んでチャレンジし続けることが大切です。そうしてそれぞれのウェルビーイングを実現させてほしいという思いが、生徒育成方針に込められています」

同校の生徒は「真面目で良い子たち」だという。言われたことには素直に取り組む

ものの、内面に抱えたものをうまく外に出せずにいる面も浮かぐが、教員からは「真面目さを活かしながらも、もっと気楽にチャレンジして殻を破ってほしい」との期待も聞かれる。

そんな生徒たちを「探究を実践し続ける人」へと育成するため、同校は今、生徒の学びを根本から変えていこうと取り組んでいる。

### 授業を短縮、下校時間を早め 生徒に時間を返す

「高校の学びは大学入試のためにあるのではなく、その先の人生でやりたいことや、



2学年では個人探究に取り組む。放課後に実験を行ったり、製材会社で伝統構法(木組み)を学んだり、生徒自ら考えて行動を起こす。





### School Data

1923年設立／  
 普通科・探究科  
 生徒数971人(男子450人・女子521人)  
 進路状況(2023年3月卒業生)  
 大学226人・短大1人・専門学校6人・  
 その他進学4人・就職1人・その他72人  
 長野県松本市県2-1-1  
 TEL 0263-32-1142

### Outline

2023年に創立100周年を迎えた伝統校。「縣陵」が愛称。初代校長の遺訓「質実剛健であれ」「大道を闊歩せよ」「弱音を吐くな」は縣陵三大精神として代々受け継がれ、現在はスクール・ポリシーにも組み込まれている。2018年に探究科を新設し、探究的な学びを本格的に開始。探究をコアとした進学型単位制カリキュラムづくりを推進している。



進路支援係副主任  
塩原 潤先生

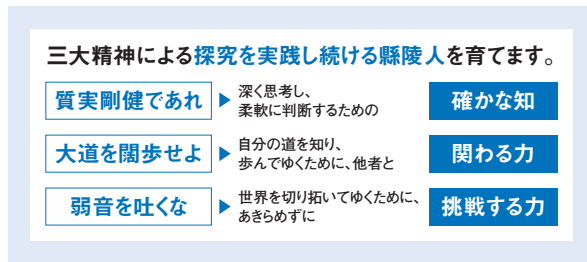


学習支援係主任  
鈴木健斗先生

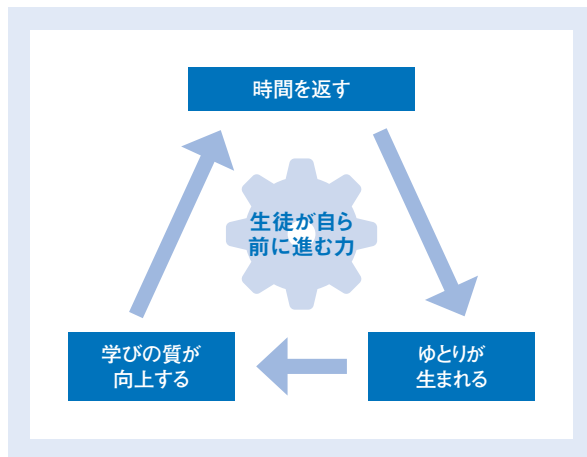


探究学習推進係主任  
宮坂正議先生

## 図1 松本県ヶ丘高校の生徒育成方針



## 図2 目指す学びの循環



なりた姿の実現に役立てるものと捉え、「教員が教える・生徒は教わる」から「生徒が自ら学ぶ・教員はそれを支援する」というマインドセットに変えていきたい。目新しい考え方はありませんが、そのためのスキームを学校としてしっかり作っていきたいと考えています」

そう話すのは、学習支援係主任の鈴木健斗先生だ。以前は進路指導の補佐的な位置づけで出口対策を行っていた学習指導係は、「自律的に学べる生徒を育てる」というビジョンをもつ学習支援係となった。専任担当者のほか、各学年団、探究、情報、進路、国際など多様な係からもメンバーに入る横断的な組織編制で、学校全体を有機的につなぐハブとして学びのデザインを担当している。

現在、この学習支援係中心に、生徒に時

間を返すことを起点とする、学びの好循環の仕組みづくりに取り組んでいる(図2)。生徒たちは日々の勉強や探究活動、部活動など多くのことを抱えており、「自由な時間がない」「うまく勉強時間がとれない」「一日48時間欲しい」という声が上がっていた。生徒の自己調整を可能にするためには時間のゆとりも必要ではないかと、今年度より授業時間を55分から50分に短縮した。下校時刻は30分繰り上げ、部活の終了時刻も早めるよう徹底的な取組を行っている。

同時に推進するICT活用などにより、教員はそれぞれ工夫して授業を効率化した。10月に実施した生徒への「学びの意識調査」では、「日々の授業を集中して受けられている」は76%と、5月より8ポイントも上昇。新体制は順調に滑り出し

そんな仕掛けの一つとして、今年度、毎週月曜日と金曜日の放課後に30分間のオフィスアワーを設置。部活動や職員会議などの予定は入れず、生徒が自由に教員の席を訪ね相談や質問ができるようにした。生徒が話しかけやすいよう、あえて仕事の手を休めて過ごす教員もいる。利用したことのある生徒数は、開始直後の5月時点では約120人だったが、10月には200人を超え、利用は着実に拡大。各教科の勉強や進路、探究活動などのさまざまな内容で教員と対話している。

「これまで教員に相談したくてもできなかった生徒にとっては、良いきっかけになっているようです。まだ利用者が多いとは言えませんが、自ら進むヒントを掴む生徒が

ている。

「生徒にも教員にも、前向きな気持ちや自由な発想の基になるゆとりができたのではないのでしょうか。学校現場は疲弊していくばかりの状況で、思い切った取組も必要かもしれません」(鈴木先生)

**ゆとりを生徒自ら学びへ。オフィスアワーで支援**

しかしながら、単に時間的なゆとりがあるだけで、学びの質が向上するわけではない。生徒アンケートには「学び方がわからない」「見通しをもって学べない」という声も目立つ。「ゆとりを生徒自らが学びにつなげてこそ、学びの循環を回していくことができる」というのが同校の考えだ。「それが最も難しい。多様な仕掛けが必要」と鈴木先生は指摘する。

図3 探究学習の全体像



いるなら行う意義はある。もっと気軽に利用できるように工夫していきたいと思っています」(鈴木先生)

**学校全体で取り組む探究 自走するプロセスに重点**

また、同校がカリキュラムのコアとして力を入れる探究や、国内外で行う校外研修も、生徒の自律を支援する仕掛けといえる。

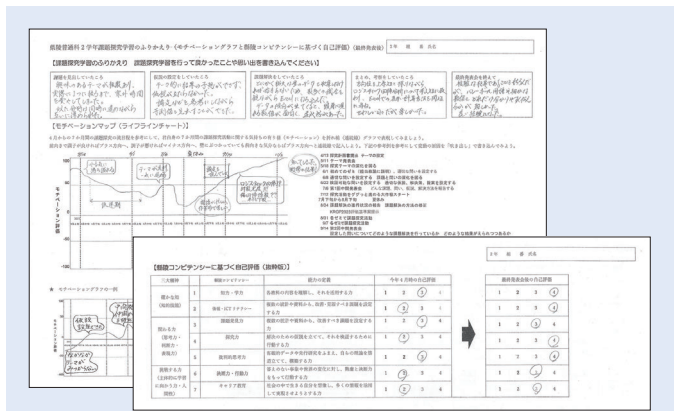
「探究学習で自分のテーマを追求した経験や、校外研修でうまくいかなかった経験が、もっと学びたいという意欲や自分で挑戦しようという動機につながります。本校の特徴であるこれらの活動を一層充実させていくことが、生徒の自律にもつながると考えています」(鈴木先生)

同校はすべての教科に探究の横軸を通す授業実践を目指している。その中心となるのが、普通科は総合的な探究の時間、探究科はそれに加えて学校設定科目「探究」で取り組む探究学習だ。基本的な流れは同学科に共通しており、1学年で探究スキルの学習とグループ探究の実施で探究活動を経験したうえで、2学年で一人ひとりが興味関心や好きを極める個人

図4 個人探究の内容例

- 投票型喫煙所を松本市内に設置し、たばこポイ捨て減少効果を検証(より良い選択を自発的に取れるように手助けするナッジの応用)
- 木曾馬の馬糞を用いてバイオエタノールを作り、生産コストを下げる
- 実際にサーカスワークショップへ入門。「ソーシャル・サーカス」で差別のない社会を目指す
- 素数に関する未解決問題に対して新たな考え方を提示する
- 環形動物「海毛虫」の生態調査および構造把握

図5 リフレクションシート



表面で活動を振り返ってモチベーショングラフの作成、裏面で「縣陵コンピテンシー」に基づく自己評価を行う。

探究に取り組む。3学年では、探究科はそれまでの探究活動についての論文作成、普通科は哲学対話など年度によって異なる活動を行う(図3)。

「結果よりも過程に重点を置くことを大切にしています。コンテスト入賞や進路につながるなど目先の結果を得ようと、教員側からテーマを与えたり過剰な助言をしたりして生徒を置き去りにするのではなく、とにかく生徒のやりたいことを重視する方針です」(宮坂先生)

学校行事の校外研修で経験する生徒自身によるアポ取りを通じ、「お願いすれば大人も協力してくれる」「社会は優しい」と認識する生徒は多い。それにより校外に出ていくハードルも大きく下がること

「探究テーマへの無理な関連づけはせず、自走するなかで未知と出会ったり困難を乗り越えたりする経験から得るものを重視した結果、自由な発想で実施することが可能になりました」(宮坂先生)

こうした考え方から、探究科約80人が2学年で取り組む海外研修は、22年度より生徒自身が個人やグループで個別にデザインする形式に変更した。生徒が個人

になる。たばこのポイ捨て削減のため投票型喫煙所を実際に市内に設置したり、差別のない社会を目指してサーカスワークショップに入門したり、各自の探究テーマに合わせた行動につながっている(図4)。

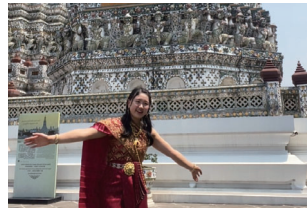
また、22年度より探究サイクルの最後のステップとして「リフレクション」に力を入れている。日々クラウド上に蓄積してきた活動の記録を振り返りながら、リフレクションシートで活動を俯瞰して身についた力を自己評価し、得たものを各自のなかに落とし込めるようにした(図5)。

「生徒が記入した内容を集計し、分析することで、データに基づきながら探究プログラムを改善していければと考えています」(宮坂先生)

**生徒がデザインする 個別海外研修をスタート**

東京研修や海外研修などの校外研修は、国際バカロレアのCASの考え方を参考に、探究学習プログラムの一部ではなく、探究学習と両輪をなして生徒が自分で考え自分で行動する力を育む活動と位置づけている。





個別海外研修では、アメリカ西海岸で現地の高校生との交流や、タイの歴史や文化に触れるなど、生徒自身がデザインした学びを実施する。

図6 探究科「個別海外研修」の行先(2022年度)

個人	グループ
<ul style="list-style-type: none"> <li>● アメリカ(ダンスレッスン)/7日間</li> <li>● アメリカ(博物館プラン)/7日間</li> <li>● インドネシア/9日間</li> <li>● ニュージーランド/10日間</li> <li>● オーストラリア/7日間</li> <li>● タイ/5日間</li> <li>● 国内 12コース</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● カンボジア/8日間・12人</li> <li>● イタリア/8日間・8人</li> <li>● フランス/8日間・13人</li> <li>● アメリカ(西海岸)/7日間・13人</li> <li>● アメリカ(東海岸)/7日間・6人</li> <li>● オーストラリア(添乗員つき)/9日間・25人</li> </ul>

の興味関心や探究テーマに合わせて訪問先や研修内容を考え、飛行機の手配も自ら行う。初年度は海外12コース、国内12コースを実施した(図6)。飛行機の乗り間違えや荷物の重量オーバーなどさまざまなトラブルはあったが、研修から帰ってきた生徒たちを見て、教員は手応えを感じているという。

「それぞれが自分たちで考えて行動し、非常に充実した活動ができたようです。人生観が変わったという生徒や、これからどこにでも行けると自信をつけた生徒もいます」(宮坂先生)

### 探究を楽しみ、授業中も探究進路選択にも変化

こうしたさまざまな仕掛けや探究をコアとしたカリキュラムのなかで、生徒はどの

ように成長しているだろうか。進路支援係副主任の塩原潤先生は、自身の数学の授業中に垣間見える生徒の変化を挙げる。

「生徒が口にした素朴な疑問から周囲の生徒と議論が始まるなど、数学の授業でも探究する姿が見られます。また、ほかの教科においても、探究学習に必要な知識の不足を感じたことが勉強のモチベーションになっている生徒が増えているようです」

学びに対する考え方の変化が、進路選択にも表れている。数年前まで卒業生の進路は地元国立大学である信州大学に集中していたが、近年は地域も学部も多様化し、海外の大学を選択する者も出てきた。

「探究学習で取り組んだテーマをもっと深めたいと進学する生徒も多く、それぞれがやりたいことや目標を明確にして進路選択しているように感じます」(塩原先生)

生徒に高校生活での自身の変化をたずねると、「自分の好きなことを自力で進める力がついた」「挑戦する力と度胸が身についた」「失敗しても立ち直れるようになった」「試行錯誤することを楽しめるようになった」と、さまざまな成長の様子が挙げられた。

### 「とにかくやってみよう」教員の意識から変えてきた

学びのあり方を変えるために、授業時間の削減や個別海外研修の実施など、特徴的な取組も実現してきた同校。その背景には、教職員の「とにかくやってみよう」という機運の高まりがある。

「最初からガチガチに固めない緩やかな

計画で、とにかくやってみる。やってみて問題点が見えたら、次年度の改善につなげてきました」(宮坂先生)

エビデンスに基づいて議論する教職員研修、管理職のリーダーシップ、まだ成功体験が少ないからこそ思い切った取組ができる若手教員の活躍などが、同校の挑戦を加速させている。

「自律的に探究し続ける人を育てようとするなら、まず教員が自らその姿を見せることが大切です。私たちが一歩踏み出

してやってみようとすることで、生徒も失敗を恐れず前向きに挑戦することを後押しするはずだと思います」(鈴木先生)

その先に、生徒が自ら学校を動かすようになることも期待されている。

「ここまでは地域からの要請や教員主導で進めた。次の段階として目指したいのは、生徒が主体となって教員に働きかけ、地域も巻き込み、動かしていく学校です。そんな学校づくりに向かっていけたらと思います」(宮坂先生)

## Interview

### 一時は不要と思った大学進学に意味を見いだした

高校入学後、学校外のさまざまな人の生き方や考え方に触れて、それまで漠然と思っていた単線的な進路に疑問をもち、「大学進学は必要ない」と思った時期も。しかし、探究学習に取り組むうちにその考えが覆りました。私は探究学習が楽しくて良い学びだと思うのに、面倒だと言う人もいます。そこで、みんなの探究モチベーションを高めることを探究テーマにして、LINE相談窓口の設置やワークショップ開催などを行いました。そのなかで将来、探究学習の改善に携わるという目標ができました。そのための理論や知識を大学で身につけたいと、今は受験勉強をがんばっています。(国際探究科3年生・中島桃和子さん/写真右)

### 探究に打ち込み、学びたい分野に広がり

個人探究では、自分の「好き」から発想していききました。そこで気づいたのは、趣味の釣りで使うルアーはプラスチック製が多く、マイクロプラスチック汚染につながっているのではないかと。環境に優しいルアーができないかと、最初はゼラチンでグミのようなルアーを作り、実際に釣ってみて、失敗。ほかにも何パターンも検証して、最適な素材を絞り込んでいきました。自分のアイデアの商品化にも興味湧くようになり、大学は経営工学分野に進みたいという目標につながりました。(自然探究科3年生・伊藤蒼介さん/写真中央)

### 挑戦する力と度胸が身についた

中学までは受動的なタイプで、最初、探究活動にも自信がありませんでした。個人探究では、子ども食堂でのボランティア活動の経験を基に、助けを必要とする人がきちんと子ども食堂を利用できるようにすることをテーマに設定し、市役所や児童相談所などの協力も得ながら、子ども食堂の正しいイメージを伝えるさまざまな広報活動に取り組みました。「迷惑がられるかな」という考えを一切捨て、自分のやりたいことや関わりたいことに突っ込んでいく。そのなかで挑戦する力と度胸がついたと思います。(普通科3年生・伏見百々花さん/写真左)

